

1 研究主題

自ら学び続ける児童の育成
～対話活動を取り入れた授業づくり～

2 研究仮説

子どもたちが「対話したい」という気持ちを高めて、活動に合った対話スキルを活用することができれば、主体的な対話活動が引き出され、学びを深めることができるだろう。

3 研究の主なあゆみ

日程	内容	備考
1学期	研究主題、副主題、研修計画の立案 対話スキル・話型の作成	
7月27日	特別支援研修 「学校全体で取り組むポジティブ行動支援」	講師：山口大学教育学部 准教授 宮木 秀雄 様
9月28日	高学年ブロック全体授業 算数科 6年生 「円の面積」	講師：周南市教育委員会学校教育課 指導主事 中村 研一 様
10月24日	中学年ブロック全体授業 道徳科 4年生 「ぼくらだってオーケストラ」	講師：光市立光井小学校 校長 温品 賢二 様
11月29日	低学年ブロック全体授業 算数科 2年生 「かけ算（2）」	指導者：山口大学教育学部附属光小学校 教諭 兼安 陽一朗 様
2学期 3学期	各ブロックの仮説解明の視点を生かした一人一授業	

4 研究の実際



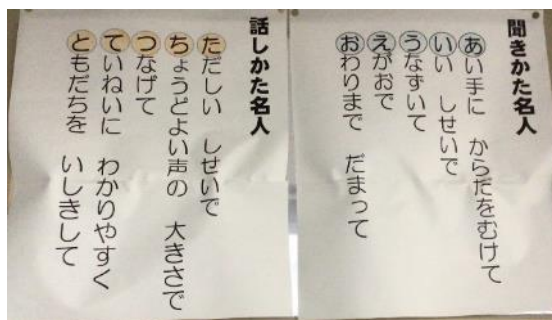
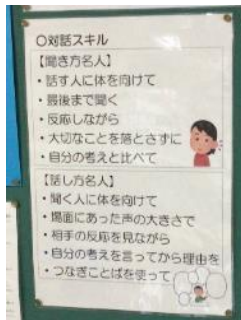
校内研修
授業後「対話活動」について振り返る教員



第2学年 算数科
タブレットを活用し、書き込んだ図を見せながら説明している児童



第6学年 算数科
タブレットを活用し、複合図形の面積の求め方を考えている児童



第4学年 道徳科

自分の考えをワークシートに記入し、友達に伝えている児童

対話スキル「話し方名人・聞き方名人」

各ブロックで内容を考え、学級に掲示している。教科を問わず様々な場面で指導している。 【参考資料】北見市立北小学校 春日井市立出川小学校 他

5 研究の成果と今後の課題

〈成果について〉

○対話スキルの向上、発表の活性化

対話スキル「話し方名人・聞き方名人」を各ブロックで作成し、それぞれ学級に掲示して指導してきた。どの教科においても対話活動を積極的に取り入れ、具体的に指導していくことで、教員も児童も対話活動への取組に慣れてきたように感じる。また、友達と話し合うことで、自分の考えに自信をもつことができ、一斉授業の場面でも積極的に発言する児童が増えたように感じる。

○ICTの効果的な活用

対話活動を活性化する視点の一つに、「自分の考えをもつ」ことが挙げられる。その際に自分の考えを表すツールとしてタブレット端末の活用が進んできている。タブレットに記入したことを見せ合ったり送ったりして、対話活動をより円滑に進めることができた。具体的には、算数科で解き方を図に書き込んだり、道徳科で登場人物の気持ちをハートメーターに表したりする活動が見られた。ICTを活用することで、より効率的に学びを進められることが分かった。

〈課題について〉

○対話活動の質の向上

対話活動は手段であり、あくまでも目的は3つの資質・能力（学びに向かう力・人間性など、思考力・判断力・表現力、知識・技能）をバランスよく育むことである。しかし、本校では対話活動が児童同士の伝え合いや教師と児童の対話にとどまっているのが現状である。対話活動を通じてより主体的に課題を解決したり、生活に生かしたりしようとする能動的な様子が見られることはあまりなかったように思う。

○ICTの継続的な研修

日々進歩するICT環境の中でより効果的で効率的な学習を展開していくためには、我々教員が継続的に学び続ける必要がある。少し前までは、一人1台のタブレット端末を使って、写真を撮ったり検索したりすることが中心であった。しかし今では、アンケートに答えたり、考えを共有したり、ダンスや歌の練習に使ったり、自分に合った問題を解いたり、できることが次々と増えている。今後も進化し続けるICTを学び続けていかなければ、これからの教育に対応できなくなってしまうのではないかと不安を感じる。そうした懸念はあるものの、全てがICTによって変わってしまうわけではないので、ICTを学びながらこれからも大切にしていっていきべきものも守って

いきたい。

〈来年度に向けて〉

○来年度に向けて

来年度にむけて、次の2点をあげたい。

1点目は、**さらなる対話活動の充実**である。前述したように、対話スキルなどを指導することで一定の成果はあったが、活発に対話することが目的ではない。資質・能力をバランスよく育むための対話活動を展開したい。対話することで新しいことに気付く、考えが深まる授業を目指していきたい。

2点目は、**効果的な学習の振り返り**についてである。児童が「何をどのように学んだか」「何ができる、分かるようになったのか」を児童一人ひとりが自覚することが、生きる力の育成や確かな学力につながる。そのためには授業や単元の終末で、振り返りを行うことが重要になると考える。何をどのように振り返らせ、さらにどのようにフィードバックしていくかが課題になるだろう。また、教員からは振り返りの時間が確保できないという意見が多く聞かれる。観点を決めたり ICT 機器を活用したりして、より効率的に振り返りをする方法も今後検討していかなくてはならないと思われる。